

梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』

第5章 1-20 偈—物語りと仮面劇—

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、
ピーター・ダニエル・サント

1 はじめに

前稿¹に引き続き、本稿では『サマーヨーガ・タントラ』(*Sarvabuddha-samāyogaḍākinijālasaṃvara*) 第5章 1-20 偈の梵文和訳を提示する。第5章は100 偈からなり、*kathāmudrājñānakalpa* と名付けられる。本稿ではこの中の1-20 偈のみを扱い、残る21-100 偈は次稿以降で扱う。

2 第5章全体の科段

5.1-4 導入

5.1 序

5.2 金剛薩埵と悉地

5.3-4 衆生利益のための遊戯による悉地

5.5-7 六部族主共通の準備行 (≈ 理趣広経D488, 232a5-b1)

5.5 ガナによる曼荼羅

5.6 尊格の仮面をつけた踊り

5.7 各曼荼羅の供養

5.8 六部族主の鼓舞の導入句：物語りによる一切諸仏の遊戯

5.9-13 金剛薩埵の鼓舞 (āśvāsa)

5.14-38 毘盧遮那の鼓舞

¹ 伊集院ほか2019, 2020, 2021。

- 5.14–15 過度な空性を修し慈悲を欠く仏教徒たち
- 5.16 金剛薩埵が毘盧遮那を化作し彼らの救済を行う
- 5.17 正しい空性、智慧と慈悲の不二の説示
- 5.18–19 無分別を確信した上で有分別なる説法をなす毘盧遮那
- 5.20 如来への讃頌の導入（5.17–20: cf. *Samputa* 1.3.14–18）
（ここまで本稿に収録）
- 5.21–25 如来への讃頌—執金剛阿利沙偈
- 5.26–29 讃頌の功德
- 5.30–38 成就法
- 5.39–62 ヘールカの鼓舞
- 5.63–70 蓮華舞自在の鼓舞
- 5.71–78 金剛日の鼓舞
- 5.79–98 最勝馬の鼓舞
- 5.99–100 まとめ

本稿の末尾には3点の資料を付す。5.1–20の梵文刊本への正誤表（資料1）、注釈3本の釈文の所在対応表（資料2）、5.17–20対応偈へのアバヤーカラグプタ（12世紀頃）の注釈文の梵本テキストと試訳（資料3）である。

3 6つの物語り

第5章の章題 *kathāmudrājñānakalpa* に現れる *kathā* とは「物語り」のことであり、アーナンダガルバ（8世紀後半–9世紀前半²）によると、「物語りとは、昔の出来事（*lo rgyus*）の説示を本質とする」という³。本章にはそ

² Szántó and Griffiths 2015: 368.

³ 『理趣広経』の対応偈に対する注釈にもとづく（D2512, *i* 48a2–5: *gtam rgyud ni sngon gyi*

の名の通り「太古の昔に (bhūtapūrvam)」などから始まる6つの物語りが語られている。6つとは、金剛薩埵、毘盧遮那、へールカ、蓮華舞自在、金剛日、最勝馬という六尊の出現にまつわる物語りである。その大筋は、金剛薩埵が太古の昔に衆生たちを教え導くために毘盧遮那以下の五尊として顕現したというものである。

6つの物語りにはそれぞれ奥付けが付され、「金剛薩埵の鼓舞」(vajrasattvāśvāsa) から始まり、「最勝馬の鼓舞」(paramāśvāśvāsa) で終わる。つまり六部族主の「鼓舞」と表現される。「鼓舞」と訳した āśvāsa という語には「蘇息」「安息」という訳も可能だが、ここでは金剛薩埵などと同体化している行者自身を、物語りの舞踏の上演で鼓舞するという意味で暫定的に理解した。一方で、六部族主が衆生を「安息させる」物語りが説かれていると理解することも不可能ではない⁴。

本稿では六部族主の鼓舞の中でも「金剛薩埵の鼓舞」と「毘盧遮那の鼓舞」を扱う。前者は第一の物語りであり、金剛薩埵が永遠にして堅固な存在であることを語る。金剛薩埵は行者自身であり、毘盧遮那以下の五尊の本体として位置づけられている。つまり五尊は金剛薩埵が各目的に応じて顕現した存在ともいえる。

4 毘盧遮那の物語り

第二の物語りである「毘盧遮那の鼓舞」では、太古の昔に既に仏教は存在していたが、「一切衆生は、過度な空性 (atyantaśūnyātā) に没頭したせい

lo rgyus bstan pa'i rang bzhin can no)。

⁴ いずれの理解を支持するかは明確ではないがブラシャーンタミトラは次のように積する (D1663, 68b4-5)。「ちょうど自らのガナの曼荼羅の中で本尊と瑜伽する弟子と共に自らの標 (*cihna) と印 (*mudrā) を具えて自ら [六部族主の]「鼓舞」(āśvāsa) を物語る (kath-) ように、同じように弟子たちにも [鼓舞を] 物語るべきである。つまり彼らが本尊との瑜伽を通じて自らの完全な信解の円満を完成するために物語るようにそのように実践すべきである」。āśvāsa は桜井 1996: 166-169、静 2022: 29 も参照。

で、滅という決まり事（法性）に専念し、滅して、般涅槃してしまった」（5.15）という⁵。そして「かの金剛薩埵は、あらゆる解脱を浄化するために、仏（毘盧遮那）としての化作をもたらした」（5.16）。つまり誤った空（声聞の無余依涅槃）にとらわれた衆生たちを教導するために金剛薩埵は毘盧遮那として出現して人々の謬見を正し、慈悲と智慧が不二であるところの正しい空性を教示した（5.17-19）。それは人々に入滅の道から救済の道へ、つまり自利の声聞道から利他の菩薩道への転向を促すものである。

このうち 5.17-20 は『サンプタ』（*Samputodbhava*）1.3.14-18 とほぼ一致するため、拙訳では偈頌理解の補助として『サンプタ』の当該偈に対する『アームナーヤマンジャリー』（*Āmnāyamañjarī*）の注釈箇所を参照した（稿末資料 3 参照）。またこの毘盧遮那の物語りに関して注釈者の一人プラムディタヴァジュラは、太古におけるタントラの説法をめぐる興味深い説を展開する（後述）。

毘盧遮那の物語り自体は 5.19 で完結する。5.20 は讃頌の導入であり、讃は次稿で扱う 5.21-25 偈に説かれる。この讃はいわゆる「執金剛阿利沙偈」と一致し、『トリサマヤラージャ』に由来するとみられ、『大日経』など複数のタントラにも登場する。続く 5.26-29 ではこの讃頌の詠唱によって獲得される功德が説かれ、さらに 5.30-38 ではそのための成就法の次第が説かれる。その中には詠唱時の音階や節回しへの指示も見られる。以上で「毘盧遮那の鼓舞」は完了する。その後には「ヘールカの鼓舞」以下の物語りが続く。

5 物語りと仮面劇

以上の物語りは諸尊への供養として捧げられるものであるが、それはただの「語り」ではない。5.5-8 によると、恐らく仮面をつけて踊るオペラのような演劇による供養行為だったと理解できる。例えば正倉院に伝わる面

⁵ インドラナーラの注は「物語り」に追加の因縁譚を説く（D1659, 287a6-b1）。

を用いた伎楽や、チベットの面を用いたチャムの踊りなどのような仏教仮面劇にも通底しうると考えられる。但し、演劇といっても娯楽というよりはむしろ宗教実践そのものであり、とくに仮面は、行者と尊格との一体化を補強する装置にほかならず、憑依を促す法具として機能する。

このような『サマーヨーガ』の仮面劇の供養に関する一連の記述（5.5–8）は、『理趣広経』（*Śrīparamādyā*）にも、ほぼ対応する一連の偈が存在する。但し、物語りが仮面劇仕立てで進行したか否かは、偈自体からは必ずしも明確ではなく、また仮面を意味する語彙についても問題が残る。そのため、以下にはその二点の解明を目指して資料を検討したい。

5.1 サマーヨーガ 5.6 偈所出の pratimukha と仮面の素材

まず『サマーヨーガ』5.5–8の記述は下記の通りである。括弧内の補足は注釈類による（後掲の和訳参照）。

毎日、毎月、または、毎年、あるいは加持に従って、諸々の仏の最勝樂（ガナ曼荼羅）をもって踊るべきである。（5.5）

一切の鉱石（dhātu）で出来た（つまり金製や銀製の）、または命（jīva）や根（mūla）で出来た（つまり象牙製、角製、木製の）、本尊の **pratimukha**（尊顔を模した仮面か）を用いて、[諸尊の] ムドラーを伴う踊りが成就する。（5.6）⁶

⁶ sarvadhātumayair vāpi jīvamūlamayais tathā | svādhīdevapratimukhaiḥ siddham mudrāpranartitam ||; khams kyi ngo bo thams cad dang || de bzhin srog dang rtsa las 'byung || rang gi lha yi cha lugs su || sgrub pa'i phyag rgyar rab tu bya ||. 5.6 偈は *Caryāmelāpakapradīpa* に引用されるが、Wedemeyer 氏の梵文テキストと訳は拙訳とは大きく異なる。Cf. *Caryāmelāpakapradīpa* IX (ed. Wedemeyer), pp. 467–468: sarvadhātumayī vāpi jīvamūlamayas tathā | svādhīdaivam pratimukhaiḥ cihnamudrāpravartanam ||; *ibid.*, pp. 622–623: khams kyi rang bzhin thams cad dang || de bzhin srog dang rtsol (read: rtsa) las byung || rang gi lha la mngon phyogs pa'i ||

あらゆるムドラーを奉獻することにより奉仕すべきところのあれやこれやの曼荼羅を一切の弟子衆と共に供養しながら称揚せよ。(5.7)

そして一切儀軌の物語り (kathā) を通じて、適切な(部族主ごとの) 変現なる、一切諸仏の変現を私は説こう。(5.8)

くり返しとなるが、ここでは二つの問題が残る。すなわち①仮面の舞いと物語りとの関係が不明瞭である点、②「仮面」と暫定訳した pratimukha (上記太字) という語の意味が確定できない点である。pratimukha は『サマーヨーガ』6.9, 6.49, 6.82, 6.87 にも出るが文脈からはその意味を確定し難い。

pratimukha は中性形の名詞で使用される場合は、「(劇の) 展開部」⁷、「返事」など、形容詞の場合は「対面の」などを意味するが、「仮面」という意味自体は、目下、辞書類に見つけ出すことはできなかった。しかし *Haravijaya* ではこの語が「顔の鏡像」の意味で使用される⁸。また *Nāṭyaśāstra*

grup pa'i phyag rgyas rab tu bskor ||; *ibid.*, p. 293: "(...) Made of all the lements, /Formed, too, of the root of vitality. The employment [of] the symbols (*cihna*) and seals (*mudrā*) /By those face-to-face with their own presiding deity, [is as follows:] (...)"

⁷ 戯曲を構成する5連のプロットの一つ。次注を参照。

⁸ Moniel-Williams の梵英辞典には“the reflected image of the face”とあり、*Haravijaya* を典拠としている。*Haravijaya* 1.2 への Utpala 注によると pratimukha は「顔の反射像」(mukhapratimā) を意味する (Pasedach 2011: 16 参照)。Cf. *Haravijaya* 1.2: jṛmbhāvīkāśitamukhaṃ nakhadarpaṇāntarāvīśkr̥tapratimukhaṃ gururoṣagarbham | rūpaṃ punātu janitāricamūvimarśam udvṛttadaityavadhanirvahaṇaṃ harer vah || 「口 (mukha) を大きく開き、爪の鏡面には尊顔の反射像 (pratimukha) を映し、激しい怒りを宿し (garbha)、敵軍に熟慮 (vimarśa) をもたらし、不義なる悪魔(ディティの子孫)殺しを帰結 (nirvahaṇa) とするところの、ハリ神 (ナラシンハ) の御姿が汝を浄化しますように」。これらの形容句に登場する mukha, pratimukha, garbha, vimarśa, nirvahaṇa は戯曲を構成する5連の

では、接頭辞 *prati* に身体部位の名称を付した *pratipāda*, *pratiśiras*, *pratihasta*, *pratitvaca* という語がそれぞれ、劇中人物を模した足、頭部、手、肌のコスチュームを意味する例がある⁹。それらに従うならば当該の *pratimukha* も、尊格の「尊顔の模造」である仮面などを意味すると予想されるが、結論はいったん保留し、まずはさらに関連資料を確認したい。

この *pratimukha* に付される 5.6 偈の一連の形容句「鉱石からできた」(*dhātumaya*)と「命や根からできた」(*jīvamūlamaya*)について着目すると、プラシャーンタミトラ (9 世紀頃) は次のように注釈する。

「一切の鉱石で出来た」(*sarvadhātumaya*) とは、金や銀などを素材とするものである。「命」(*jīva*) とは象牙などの素材からつくられたものである。「根で出来た」(*mūlamaya*) とは、木の素材からつくられたものである (D1663, 68a1-2)。

またプラムディタヴァジュラ (10-11 世紀頃か) は次のように注釈する。

また三味の曼荼羅を観想しようと望まない場合、*pratimukha* (*chalugs*、仮面か) の使用による成就を説示して、「一切の鉱石 (*dhātu*) で出来た」云々という。[「鉱石」とは] 黄金、銀、銅のことである。「または命 (*jīva*) や根 (*mūla*) で出来た」とは、「命」から出来た象牙や角などや「根」から出来た樹木を彫刻して (*'bur du brkos nas*) 本尊の *pratimukha* となすべきである (D1660, 399a2-3)。

プロット (*sandhi*) である起、承、転、休、結を意味する掛詞である。Somadev Vasudev 氏のご教示による。山崎 2022: 146 n. 21 も参照。

⁹ *Nāṭyaśāstra* 23.206cd-207ab: *pratipadam pratiśraḥ pratihastam pratitvacam | tṛṇajaiḥ kiliṅjair bhāṇḍaiḥ sarūpāṇīha kārayet ||* Gosh 2020: 583 “Imitation of legs, heads, hands and skin should be made in their likeness with grass, mat and Bhāṇḍa.” Cf. Gosh 2020: 571.

上記の二注釈から、*pratimukha* の素材が金属製、象牙製、木製であり、象牙や木を彫刻して作ることが知られる¹⁰。この 5.6 で用いられる *dhātu, jīva, mūla* の三連語は、*Rasendracūḍāmaṇi* にも確認され、そこでは薬の三種の材料としてそれぞれ鉱物類、動物類、植物類を意味するので¹¹、同注釈の理解は妥当なものであり、またその理解は後述の『理趣広経』対応偈からも支持される。しかしながらこれらの注釈を参照しても、*pratimukha* の語義自体には依然として不明瞭な点が残る¹²。

5.2 理趣広経の対応偈における仮面劇

さて以下には、先述①②の2点の問題（つまり物語りと仮面の舞いとの関係および仮面の語義に不明瞭な点が残ること）を解決するために、その

¹⁰ インドラナーラの注には次のようにある。「最初に広義な中でも特定の観点からすると、三味の曼荼羅に入壇する者たちは所縁たる対象を明瞭にして成就するために、金銀銅鉄などの**鉱石で作られたもの** *dhātumaya*、または**生命で作られた** *jīvamaya* つまり〔動物の〕角、歯、骨などで作られたもの、または**根** *mūla* のある木で**作られたところ**の本尊の *pratimukha* と一致した身体と標 (*cihna*) と頭飾り (*dbu rgyan*) などの**成就のムドラーを成就すべきである**。一方、〔次に〕深義（狭義）では、方便 (*thams cad → thabs*) と智慧との不二の三種の観点から、三種の風、四種の輪、六根の顕現が、**界を本質とするもの** *dhātumaya* である。そこにおける三種の文字の拡大と収斂、四種歡喜の拡大と収斂、根境の拡大と収斂が、**生命で作られたもの** *jīvamaya* である。同じく、方便と智慧と不二なる本尊の *pratimukha* として成就すべきムドラーを確立するべきである、という」(D1659, 289a7–b2)。細部に不明な点も残るが、大意としては外的な解釈と内的な解釈を並べ、物質としての *pratimukha* および観想として *pratimukha* について言及していると理解できる。

¹¹ *Rasendracūḍāmaṇi* 3.11ab: *trividhaṃ bheṣajam dhātuḥjīvamūlamayaṃ tathā*. Vasudev 氏のご教示による。

¹² なお前半句と類似する表現は下記にもみられる。*Varjradāka* 36.3: *sarvadhātumayī vāpi jīvamūlamayī tathā | citritaṃ saṃskṛtaṃ cāpi sarvācāryaṃ tu dāpayet ||* 杉木 (2004: 160) 訳「すべての金属より成る〔象徴物〕、あるいはまた、生命にかんするものと〔木の〕根より成る〔象徴物〕がある。色彩豊かな〔装飾〕、整えられた〔装飾〕がある。〔それらを〕すべての師に彼は施すべきである」。

手掛かりとなりうる、『理趣広経』（*Śrīparamādyā*）第9章の一節（D488, 232a5–b1）¹³の和訳を以下に提示する。この一節は上記の『サマーヨーガ』5.6–8 偈および9.342–344 偈に対応する。両者の対応を確認できるように、対応文には両者の原文を和訳とあわせて提示する。また訳文には本稿筆者による見出しを付し、随時『理趣広経』に対するアーナンダガルバの注（D2512, i 47b4–48b4）を参照した¹⁴。

それから最勝秘密の種々のムドラーの供養は [次の通り]。

（物語りと標とムドラーを用いた舞踏による供養）

rdo rje sems dpa' la sogs lha'i || rtog pa thams cad rnam 'phrul ba || gтам
rgyud phyag mtshan phyag rgya yis || gang zhig gar de rol mo yin ||¹⁵

金剛薩埵を始めとする [宝鈴女までの一群の] 尊格の一切のカルパ（つまり大三法羯印）の変現（*vikurvita）[によって¹⁶、] 物語り（kathā）と標（cihna）とムドラーを用いる踊り¹⁷、それが遊戯

¹³ プタク版では No. 477, *tha* 222a1–6 に相当する。

¹⁴ ここでの供養の対象は鑄造仏（lugs ma）や塑像仏（brdungs ma）を配置した曼荼羅とされる。アーナンダガルバ注（D2512, i 47b4–5）参照。

¹⁵ Cf. *Samāyoga* 5.8: ataḥ param pravakṣyāmi sarvabuddhavikurvitam | kathayā sarvakalpasya yathāyogavikurvitam ||

¹⁶ アーナンダガルバ注（D2512, i 48a1–2）の和訳：「それらの**カルパ**であり、かつ**一切**でもあるものが、sarvakalpaである。つまり、マハームドラー、サマヤ・ダルマ・カルマムドラーである。それらの**変現**（vikurvita）とは、あらゆる姿を示現して衆生の利益をなさることである。一切カルパたるそれらの変現による踊り、それが**遊戯**（rol mo）である、と [文が] つながる」。

¹⁷ アーナンダガルバ注（D2512, i 48a2–5）の和訳：「**物語りと標とムドラー**によってという [文言] の中で、**物語り**とは、昔の出来事（lo rgyus）の説示を本質とする。本初金剛などという本尊の武器が**標**（cihna）である。本尊のマハームドラー（本尊の仕草）

(rol mo) である (cf. *Samāyoga* 5.8)。

(踊りに用いる仮面の素材について)

gser ram yang na dngul dang ni || de bzhin shing las byas pa yi (read:
yis) || rang gi lha yi gdong nmams kyis || grub pa'i phyag rgyas gar nmams
bya ||¹⁸

黄金製、銀製、そして木製の本尊の*pratimukha（仮面か）を用いて、悉地のムドラーによる踊りを為すべきである (cf. *Samāyoga* 5.6)。

(後供養：心呪による曼荼羅供養)

dkyil 'khor gang dang gang brten pa || phyag rgya sna tshogs mchod pa
yis || slob ma'i tshogs ni de dang de || bzla zhing thams cad mchog tu
gzhug ||¹⁹

あらゆるムドラーを奉獻することにより奉仕すべきところのあれやこれやの曼荼羅を、一切の弟子衆と一緒にあって、念誦しながら称揚せよ (cf. *Samāyoga* 5.7) ²⁰。

を結ぶことを究竟とする、昔の出来事の在り方を示すのがムドラーである。物語りと標とムドラーによって本尊の踊り (gar) の情緒 (nyams)、想い、まなざし、笑い、歓喜などムドラーをそなえた上唇、歯、眉、口の支分 (身体部位) の変化、それが踊りであると認められる。それ (踊り) はまた仏菩提を成就せしめるものであり、この各々随時の成就によって、自らの悉地を達成すべきである。

¹⁸ Cf. *Samāyoga* 5.6: sarvadhātumayair vāpi jīvamūlamayais tathā | svādhīdevapratimukhaiḥ
siddhaṃ mudrāpranartitam ||

¹⁹ ~ *Samāyoga* 5.7: yad yan maṇḍalam āśved viśvamudropahārataḥ | tat tac chīsyagaṇaiḥ sarvaiḥ
pūjayan tu mahāpayet ||

²⁰ アーナンダガルバ注 (D2512, i 48a7-b2) の和訳: 「どの曼荼羅に向かって [供養する

(供養によって得られる守護と成就)

sna tshogs cho ga 'di yis ni || sdig pa kun las rnam grol 'gyur || bsod nams
kun kyang 'phel 'gyur te || rtag tu srung bar 'gyur ba yin ||²¹

この遍く儀軌によって一切の罪過から解放され、一切の福德によって増大し、永遠なる守護が生じる (cf. *Samāyoga* 9.342)。

rims dang gdon dang dug dang nad || sbyar dug mkha' 'gro'i 'tshe ba dang
|| bdud dang gsod par byed pa rnams || 'dis ni rab tu zhi bar 'gyur ||²²

諸々の熱、毒、おたふく風邪 (garā)、病、ダーキニーによる災厄、憑依、魔たち、ヴィナーヤカたちは、これによって鎮まる (cf. *Samāyoga* 9.343)。

dnegos grub dag ni phun sum tshogs || dga' ba de bzhin bdag po rnams ||
sangsy rgyas kun gyi bdag nyid kyi || rnal 'byor dam pa thob par 'gyur ||²³

の] かという、yad yan maṇḍalam という。その中で、五部族の諸尊の**あれやこれやの曼荼羅に奉持して**というのは、[それらを] 観想するということであり、**種々のムドラーの供養によって、それぞれの曼荼羅に向かって**、物語り (kathā) と標 (cihna) とムドラー [を用いた踊りによる供養] が終わったら、本尊の心呪を「誦して、一切の弟子衆と一緒に、その曼荼羅を」供養すべきである。またさらに悉地の/完了したムドラーの踊りのための事物 (dnegos po) について個別観察 (so sor rtog pa) をなす供養によって供養すべきである (つまり踊りに用いた仮面などを供養することを指すか)。

²¹ ≈ *Samāyoga* 9.342: anenopahāravidhinā sarvapāpair vimucyate | vardhate sarvapūnyais tu rakṣā bhavati śāśvatī ||

²² ≈ *Samāyoga* 9.343: jvarā viṣā garā rogā ḍākinyopadravā grahāḥ | mārā vināyakāś caiva praśamaṃ yānty anena hi || (Cf. *Samāyoga* 5.42)

²³ ≈ *Samāyoga* 9.344: siddhayaḥ saṃpadaś caiva ratayaḥ patayas tathā | sidhyate paramā mudrā

諸々の悉地、完成、悦楽、主、一切諸仏を自体とする最勝の瑜伽が得られるだろう（cf. *Samāyoga* 9.344）。

以上のように、極秘密なる世尊金剛薩埵によって説かれた。

上記の和訳からわかるように、ここでは物語り（*kathā*）、標（*cihna*、尊格の持ち物）、ムドラー（尊格の仕草の模倣）という三要素を用いた踊り（遊戯）で曼荼羅を供養して、その後に心呪読誦により曼荼羅を供養し、さらにその供養にはすぐれた果報があると説かれている。これによって一連の次第の流れが把握され、先に問題とした①次第の不明瞭さは解決する。『サマーヨーガ』では不明瞭だった物語りと仮面の舞踏との関係性が、『理趣広経』の記述では、はっきりと結びつけられている²⁴。つまり6つの物語りは、おそらく語り部を伴った「仮面劇」として上演されたと理解できる。

なお『サマーヨーガ』を理解するために『理趣広経』を用いることの妥当性は完全に保証されるわけではないが、少なくとも当該箇所が語単位の一一致のみならず三偈まるごとが対応している点、両テキストはほぼ同時代に成立し相互に密接な関連性が確認されている点から、概ね首肯されてよいだろう。目下、これ以上に有益な資料は他には見出し難い。

一方、上記②の問題、つまり「仮面」を指すと理解した *pratimukha* については、「黄金製、銀製、木製の本尊の *pratimukha* を用いて、悉地のムドラーによる踊りを為すべきである」とあり、その素材が述べられる。この点は先に見た『サマーヨーガ』の注釈と一致し、注釈の理解の妥当性を裏付けている。

sarvabuddhatvam uttamam ||

²⁴ 『理趣広経』の中の心呪の読誦の次第は、『サマーヨーガ』5.21-25 所出の讚の読誦の次第に対応するとも理解できる。

なお pratimukha のチベット語訳は『サマーヨーガ』では「衣装」(cha lugs)、『理趣広経』では「顔」(gdong) とあり両者の訳語は一致しないが、両タントラの三偈分が密接に対応する点を考慮するならば、原語は同じ pratimukha だったと予想される。『理趣広経』で gdong と訳されたのは韻律の都合で省略されたためかもしれない²⁵。これに相当する語はアーナンダガルバ注では gdong brnyan (顔の写し) と表現されているので、pratimukha に類する語が予想される (後述)。

5.3 アーナンダガルバの理解

さて次にこの pratimukha の語義をより詳らかにするために、『理趣広経』当該偈に対するアーナンダガルバの注 (D2512, i 48a5-7) を見てみたい。

どの姿で種々のムドラーによる供養を為すべきかという、「黄金」云々と『理趣広経』では説く。ある尊格たちの身体の色が金色である場合、その本尊には黄金製の pratimukha (gdong brnyan 仮面か) を作製して、[その pratimukha で] 自分の顔面を覆って²⁶、様々なムドラーで供養すべきである。ある [尊格] たちの身色が白色の場合、その尊格たちには銀で [pratimukha が] 作られるべきである²⁷。同様にその他 [の尊格の色彩] についても知られるべきである。また木を材料とする本尊の pratimukha (gdong brnyan) には、白などの顔料で [色彩を] 変えて、[その

²⁵ しばしば他版とは異なる読みを示すブタク版もここでは同じ読み gdong をしているので参考にならない (No. 477, *tha* 222a2-3)。

²⁶ D2512, i 48a5-6: de dag gis (read: de dag gi) rang gi lha'i gser gyi gdong brnyan du byas la rang gi gdong g-yogs la.

²⁷ D2512, i 48a6: gang dag gis (read: gi) kha dog dkar po can yin na de dag gis (read: gi) dngul gyi (read: gyis) bya ba yin te.

pratimukha を] 自分の顔面に装着して²⁸、本尊の御顔の形状をしたそれら (pratimukha) によって悉地のためにムドラーという踊りをなすべきである。

ここでアーナンダガルバは、本尊の身色に応じて pratimukha の色彩を選び、木製であれば顔料を塗り、それを「自分の顔面に装着する」(rang gi gdong la bgos) と述べるので、これが「仮面」を指す可能は高い。この理解を補強する別の例を確認しておく、同じアーナンダガルバ注に次のような一節もある。

金剛薩埵の瑜伽をなす者は、金剛薩埵などの*pratimukha (gdong brnyan) を自分の顔面に装着して (rang gi gdong la bgos)、金剛薩埵などの荘厳具で自身を正しく荘厳して、その瑜伽をそなえた種々のムドラーによって供養をなすべきである²⁹。

以上の諸例によって当該偈における pratimukha が、尊格の尊顔を模した金属製または象牙彫や木彫りのものであり、踊り手が自分の顔面 (rang gi gdong) に装着するものであると確認できた。つまり当該の文脈において pratimukha は演劇用の「仮面」を意味する蓋然性が高いといえる。『理趣広経』の場合は鑄造仏を配列した曼荼羅への供養の一環として仮面演劇が登場するので、記述の曖昧な『サマーヨーガ』もおそらく同様の内容であったと考えられる。なお、正倉院などの伎楽面は木彫と乾漆造である。チャムの踊りの面は、粘土型に紙や布を張り付けたものが多いが、皮革製、金

²⁸ D2512, i 48a7: rang gi gdong la bgos la.

²⁹ D2512, i 60b5–6: rdo rje sems dpa' la sogs pa'i rnal 'byor bas rdo rje sems dpa' la sogs pa'i gdong brnyan rang gi gdong la bgos la | rdo rje sems dpa' la sogs pa'i rgyan rnams kyis bdag nyid yang dag par brgyan la | de'i rnal 'byor dang ldan pa'i phyag rgya sna tshogs kyis mchod par bya ba yin no ||

属製、木製のものもある。伎楽やチャムの起源とみられるインドの仮面劇の文化の中で、『理趣広経』や『サマーヨーガ』所説の仮面劇による諸尊供養がどのように位置づけられるかについては、今後明かされることを期待したい³⁰。

6 太古のタントラ

再び毘盧遮那の物語りの記述に戻ると、その注釈の一節には、タントラが説かれた「時代」に関わる興味深い言明が見られる。現代の研究者に前提とされている歴史観では、例えば『理趣広経』や『真実撰経』はおよそ7-8世紀ころに登場したとされる。しかしその歴史観は、当時の密教者たちにとって必ずしも前提とされていない。以下にみるプラムディタヴァジュラの一節はそのことを如実に示す。

前述のように毘盧遮那の「物語り」(kathā)には太古の過去の出来事が描かれる。そして注釈者プラムディタヴァジュラは、その「過去」をインドの神話的歴史観にあてはめて説明する。注釈の対象となるのは、次の『サマーヨーガ』5.14-15である。

太古の昔、永遠にして偉大なる如来(=金剛薩埵)の教言の御許、かつて世界が存続していた。その時に一切衆生は過度な空性に没頭したせいで滅という決まり事(法性)に専念し、滅して般涅槃してしまった。(5.14-15)

この偈をプラムディタヴァジュラは次のように釈する(D399b7-400b1)。

いまや、大日の鼓舞(āśvāsa)の支分の意味が語られるべきであ

³⁰ 僧伽における演劇については例えば小林 2006 を参照。インドの仮面文化については例えば Shulman and Thiagarajan 2006 などがある。

る。太古の昔とは、過去仏の變化身の事業の生起と、拡散・収斂と所依・能依の在り方である。永遠にして偉大なる如来の教言の御許とは、かつて世尊はクリタユガの時代に、四禪の宮殿で、金剛薩埵のやり方で瑜伽をなしてから、『理趣広経』（*Śrīparamādyā*）などの瑜伽タントラをお説きになった。それを説くことによって、衆生たちは、色身などへの執着を増益した。[だから] クラクッチャンダ仏やカナカムニ仏や迦葉仏など [の過去仏] は、中程度の乗（*dbu ma'i theg pa*、密教よりも格下の乗）を教示することによって、増益を排除なされた。

[ところが] そのときに愚かな衆生たちは空性だけに執着したので、[金剛薩埵はそのような] 増益と損減を翻すために、[毘盧遮那として出現して] 方便無上および般若無上のタントラをお説きになった。それ（方便無上タントラ）はまた、『ヴァジュラダーカ』の第一章において順序通りに説かれたので、疑いをなすべきでない。般若無上 [タントラ] である一万八千 [頌] の『サマーヨーガタントラ』に関して、偉大にして常住なる（5.15）法身（=金剛薩埵）にもとづいて、如来の經典により、十地自在者の観点で、原因たる毘盧遮那による加持と灌頂と三昧と仏業をなされた。

[要するに、] かつてクリタユガの時代の最初の劫において四禪の宮殿と他化自在天と須弥山の山頂における、『理趣広経』や『真実摂経』などという、諸尊による教化のための、如来の教えの [法] 輪——つまり人々が尊格の姿を観想する [教え] ——が大昔にあったが、閻浮提で賢劫のこの [時代] において、クラクッチャンダ仏やカナカムニ仏や迦葉仏など [の過去仏] に教示された如来の教えにもとづいて、閻浮提における人々に応じて、出家者の在り方で、昔から、[声聞の三] 蔵をお説きになったのである。[しかし] そのときに一切衆生は、極度な空性などによつ

て智慧を断絶してしまい、「滅しゆくという決まり事（法性）に専念し」、知の相続が減して無余依涅槃したのである³¹。

要約すると、まずクリタユガ期に金剛薩埵が『理趣広経』や『真実撰経』などの瑜伽タントラを説いたが、衆生たちは仏の色身を増益して執着したので、それに対してクラクッチャンダ仏などの過去仏が「中の乗」(dbu ma'i theg pa) を説いた（縁起や四諦などの離貪のための声聞の教えを指す）。しかしそのせいで衆生たちは、かえって空性にばかり過剰に執着してしまい、断見に執われてしまった。それを正すために金剛薩埵は「方便無上タントラ」と「般若無上のタントラ」を説いた。前者の例としては「ヴァジュラダーカ」³²、後者の例としては「一万八千頌のサマーヨーガタントラ」が言及される。

これらはタントラが説かれた時代を明言する稀有な記述といえる。ここで金剛薩埵は時間を超越した存在であるため、過去仏の前にも後にも、時間の制約を超えて登場している。

またここで注目すべきはプラムディタヴァジュラが『理趣広経』と『真実撰経』を、『サマーヨーガ』に先行するものと位置付けている点である。つまり『サマーヨーガ』のタントラ分類の階梯が『理趣広経』『真実撰経』とは異なると認識されていた可能性がある。『理趣広経』と『サマーヨー

³¹ プラムディタヴァジュラはさらに上記の一節に続いて次のように言う（D400b1-2）。
「放棄すべきその瑜伽（極端な空性の観想）をお知りになってから、**世尊金剛薩埵なる如来**（5.17）は、空性に一辺倒に執着している人々が空性から解放されて、無余依涅槃から退くために、毘盧遮那の胎蔵生曼荼羅（mngal skyes kyi dkyil 'khor）を生起なさった」。ここには「毘盧遮那の胎蔵生曼荼羅」という、大悲胎蔵生曼荼羅を連想させる語が現れるが、詳細は不明である。

³² ここで引かれる『ヴァジュラダーカ』が現存する『ヴァジュラダーカ』（杉木によると10世紀には成立していた）と一致する可能性は高い。プラムディタヴァジュラは9-10世紀以降のテキストを引用するという点とも一致する（Szántó and Griffiths 2017: 368）。『ヴァジュラダーカ』第1章の和訳は杉木 2004 を参照。

ガ』の実際の前後関係を判断するにはさらなる検証を要するが、このような認識が当時、存在したことは興味深い。なお不空訳『十八会指帰』では、『理趣広経』（第六～八会に相当）の次に『一切仏集会タントラ（サマーヨーガ）』（第九会に相当）が続いている。

7 中道の非認識：アバヤーカラグプタのジュニャーナシュリーミトラ批判

毘盧遮那の物語りの中でも 5.17-19 では、その教えの内容が説かれる。その中でも 5.17ab では「空としても不空としても〔両者の〕中間 (madhyamā) としても〔世界は〕認識されない (nopalabhyate)」と説かれており、仏教では通常是認されるどころの、両極端を離れた中間または中道 (madhyamā) すらも否定されている。その内容には多少の曖昧さが残るが、タントラ本文としては、中道さえも分別の対象としてはならないことを説こうとしていると理解できるだろう。一方で、注釈家たちの間ではこの偈の解釈が一致していない。

プラシャーンタミトラ (69a4-6) によると、否定されるべき中道とは、中道が完成する以前の、分別を伴った「中道」を意味するという。またプラムディタヴァジュラ (400b2-5) によるとその「中道」とは、如幻派や無住派の中観と有相や無相の唯識との両者における「中間」の見解を意味するという。そしてアバヤーカラグプタの同偈への解釈は、『アームナーヤマンジャリー』から回収される（本稿末資料3 参照）。彼は同偈の madhyamā を釈して次のように述べる。

nāpi pāra^(116r5)mārthikīprakāśavapusā nāsat tadanyaiś ca grāhyatvādi-
bhir na saḥ jagan madhyamā pratipad upalabhyate. upalabdhir hi
tasyāḥ sādḥikā, tac ca svasamvedanam pratyakṣam nāstīti sādha-

ka_(116v1)pramāṇābhāvaḥ.

また中道一つまり勝義として[形象の]照出の本質という点では存在しないことはなく、かつ[世俗として]それ(照出)以外の所取性など(二取)の点では存在しないところの世界—もまた認識されない。というのは、それ(有形象唯識の中道)を論証する手立てが認識(upalabधि)であるが、しかし(ca)それ(認識)は自己認識なる直接知覚としては存在しないからである(つまりかかる認識は知覚されない)。だから(iti)、[有形象唯識の中道を]論証するプラマーナは存在しない。

下線部はジュニャーナシュリーミトラ(10–11世紀)の下記の文言を抜粋したものと考えられる。

nāsat prakākāśavapusā, na ca sat tadanyair

ekena na dvitayam advitayaṃ na tabhyām |

itthaṃ jagad yadi catuḥśikharīvyuktam

ko bhāṣyakāramatamadhyamayor viśeṣaḥ ||³³

照出という本質の点では[世界は]存在しないのではない。そしてそれ(照出)以外の[二取の]点では存在するわけではない。

[それは]ひとつであるから両者(有かつ無)でもない。両者(有かつ無)であるから非両者(非有かつ非無)でもない。もしそのように世界が四辺を離れたならば、注釈者(プラジュニャーナカラ

³³ *Sākārasiddhi*, Chap. 6, (Thakur ed.) p. 512,6–9; *Advaitabinduprakaraṇa*, p. 365. この偈は *Sekanirdeśapañjikā* (Isaacson and Sferra 2014: 171, 270) に引用される。

グプタ)の思想と中〔観思想〕との間に、一体どんな違いがあるだろうか。

ジュニャーナシュリーミトラによると、(1)現に顕われ出ている知識の形象(ākāra)は否定しえないので世界は真実在であるが、(2)その形象を分別した所取・能取の二取としての世界は虚偽であるために真には存在せず、(3)以上の両者は同一の世界の両側面であるために別々の二つのものではなく、(4)しかしその両側面は全同でもないので世界は不二でもない、という趣旨を述べて四句分別を提示して、それらの中のどれか一つだけに固着しないことを「中道」と呼ぶ。つまり各項目は単独では誤りではないが、いずれか一つに固着することを誤謬とする立場である。

これが有形象知識論における中道の理解であるが、アバヤーカラグプタはそのような中道理解を否定する³⁴。つまり彼は『サマーヨーガ』5.17に説かれる *madhyamā* への否定とは、有形象知識論の立場における中道への否定を意味すると解釈しており、彼自身が信奉する中観思想の立場から唯識を批判している。この理解を『サマーヨーガ』本文にそのまま当てはめることはできないが、この記述はアバヤーカラグプタ自身の思想的立場を表明するものとして興味深い。解釈の余地を残すこのような『サマーヨーガ』本文の記述は、結果として後代の注釈家たちの各々の立場を浮き上が

³⁴ 但しアバヤーカラグプタは、ジュニャーナシュリーミトラのように四句分別を用いず両極端にのみ言及する点で相違する。また後者は照出する形象および自己認識を (*svaṣaṃvedana*) 勝義の上で認める立場を取るため、上記引用直後にアバヤーカラグプタは、その自己認識を論証するブラマーナはなく、かつそれを拒斥するブラマーナがあることを説き、自己認識の存在を否定する(本稿末資料3参照)。アバヤーカラグプタが *Sākārasiddhi* を知悉していたことは、彼の *Madhyamakamañjarī* の中で同書を複数回引用することから裏付けられる(Luo 2020; 65–67)。

らせているが、それが却って注釈家の立場を示す指標ともなっている。

8 和訳について

『サマーヨーガ』の梵本としてはDhīh本が刊行されているが、テキストに大きな問題を含むため、本稿の和訳は、共著者の一人であるサント氏が準備している校訂本（サント本と略）にもとづく。なおサント本は未刊行であるため、Dhīh本との読みが異なる箇所については稿末の【資料1】にまとめて示し、本和訳が依拠したテキストが確認できるように配慮した。梵文校訂に際しての校勘記はサント本に委ね、本稿では割愛する。

訳文中の角括弧は文脈上補った言葉を示し、丸括弧は補足的説明を示す。なお必要に応じて、プラシャーンタミトラ（Praśāntaと略す）とプラムディタヴァジュラ（Pramuditaと略す）の注釈における理解を注記に示した。これら注釈において用いた太字はタントラの本文を意味する。上記2種の注釈およびインドラナーラ注については各偈毎の対応箇所の所在を稿末の【資料2】に提示した。

和訳

[5.1-4 導入]

5.1 (序)

実に瑜伽にして如来なる、かの世尊金剛薩埵は、一切仏との結合を通じたダーキニーたちの網からもたらされる最勝樂である（sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasamvaram）。

5.2 (金剛薩埵と悉地)

〔金剛薩埵は〕まさに単一なるものとして成就しており（eka eva hi

saṃsiddho)、[行者の] 願いに応じて [大日など五族として] 観想される (yathākāmaniyojitaḥ)。[金剛薩埵は] 一切の儀軌の規則における (sarva-kalpavidhāneṣu)、最勝にして無上の悉地である³⁵。

5.3-4 (衆生利益のための遊戯による悉地)

種々の事業の瑜伽(karmayoga)により種々の儀軌を望む(vicitraavidhikāṅkṣin) 衆生たちを導くために (vinayārthāya)、一切の安楽 (saukhya) を成就するために、まさにかの瑜伽たる世尊 (金剛薩埵としての行者) は、一切諸仏 (五部族主たち) の変現によって行じつつ (sarvabuddhavikurvitaḥ vikurvan)、一切衆生のために、さらに迅速に成就する (sutarām āsu sidhyati)³⁶。

[5.5-7 六部族主共通の準備行]

5.5 (ガナによる曼荼羅)

毎日、毎月、または、毎年 (pratyaḥam pratimāsam vā pratisaṃvatsaram)、あるいは加持に従って (yathādhiṣṭhānato)³⁷、諸々の仏の最勝楽 (ガナ曼荼羅) をもって (buddhaśaṃvaraiḥ)、踊るべきである (nātayet)³⁸。

³⁵ Praśānta は 5.2a を勝義的なものとする。5.2b については、貪行などを行う衆生を教化するために順次、金剛薩埵を大日などの五族主の身体として観想すべきことを説く (68a2-4)。Pramudita は 5.2a を閻浮提における変化身を説くと釈し、5.2b を受用身の因としての六族主を説くとする。5.2cd の釈文は難解だが、修行道を示すものとして、密教の観想法を説く (398a7-b3)。

³⁶ 拙訳とは別の解釈として、5.2ab を 5.1 とセットにして、5.2cd を 5.3 とセットとする可能性もあるか。karmayoga は「行為による実践」とも訳しうる。

³⁷ つまり、行者が仏に加持されることに応じて、という意味で理解した。ただしこの理解は必ずしも Praśānta (68a7) と Pramudita (399a1-2) に支持されるわけではない。

³⁸ つまり仏に成り代わって演じるべしとの意と理解した。

5.6 (尊格の仮面をつけた踊り)

一切の鉱石 (dhātu) で出来た (つまり金製や銀製の)、または命や根で出来た (つまり象牙製や木製の)、本尊の *pratimukha* (尊顔を模した仮面か) を用いて³⁹、[諸尊の] ムドラーを伴う踊りが成就する。

5.7 (各曼荼羅の供養)

あらゆるムドラーを奉獻することにより奉仕すべきところのあれやこれやの曼荼羅を (*yad yan maṇḍalam āseved viśvamudropahārataḥ*)、一切の弟子衆と共に供養しながら称揚せよ (*pūjayan tu mahāpayet*)。

[5.8 六部族主の鼓舞の導入句：物語りによる一切諸仏の遊戯]

5.8

そして (*ataḥ param*) 一切儀軌⁴⁰の物語り (*kathā*) を通じて、適切な (部族主ごとの) 変現 (*vikurvita*) なる、一切諸仏の変現を私は説こう⁴¹。

[5.9–13 金剛薩埵の鼓舞]

5.9

秘密かつ最勝にして心地良い、一切にとっての自己にいつでも依拠してい

³⁹ *pratimukha* の語義については、注釈および関連する『理趣広経』とそのアーナンダガルバ注の記述とともに、本稿序文を参照。

⁴⁰ *vajrasattvāśvāsa* などを指す。

⁴¹ *Pramudita* (68b4–5) は次のように説明する。「以下のように説かれたことになる。ちょうど、自らのガナの曼荼羅の中で本尊と瑜伽する弟子と共に、自らの標 (**cihna*) と印 (**mudrā*) をそなえて、自ら [六部族主の]「鼓舞」(*āśvāsa*) を語るように、同様に弟子たちにも同じく語るべきであり、彼らは本尊との瑜伽によって、自らの完全な信解の円満を完成させるために語りに応じて実践すべきである」。

る、一切仏からなる薩埵（sattva）たる金剛薩埵は最勝樂である⁴²。

5.10

じつにこの世尊たる瑜伽は、堅固かつ究極に永遠であり、常に現在しており（pratyutpannah）、そして本質（svabhāva）であり超え難い。

5.11

いっぽうで種々の事業の瑜伽により、種々の儀軌を望む者たちにとっては（vicitravidhikāṅkṣiṇām）、仏や持金剛などは、化現した導き手であると伝えられる（kṛtakā vinayāḥ smṛtāḥ）⁴³。

5.12

この方（世尊金剛薩埵）は、一切諸仏を始めとする不動と動なる全ての存在になり、一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされた最勝樂に [なる] ⁴⁴。

5.13

この幻の瑜伽により、あらゆる点で最上の一切のものが [成就し]、仏を始めとする導きにより（buddhādivinayaiḥ）、最上の一切衆生利益が成就する。

[以上] 吉祥金剛薩埵の鼓舞（āśvāsa）。

⁴² この偈は『サマーヨーガ』1.1 など、ヴァリエーションを含んで繰り返し登場する。

⁴³ 5.11 は暫定訳である。この偈は *Jñānasiddhi* (p. 115) に引用される。

⁴⁴ この偈の構文理解については、伊集院ほか 2019: 77 n. 62 参照。

[5.14–38 毘盧遮那の鼓舞]

5.14

太古の昔 (bhūtapūrvam atīte 'dhve⁴⁵)、永遠にして偉大なる如来 (金剛薩埵)⁴⁶の教言の御許でかつて世界が存続していた (tathāgatasya pravacane prāg āsī jagataḥ sthitiḥ)⁴⁷。

5.15 (過度な空性を修し慈悲を欠く仏教徒たち)

その時に一切衆生は過度な空性に没頭してしまった (atyantaśūnyatāyuktāḥ sarvasattvās tadābhavan)⁴⁸。[そして] 滅という決まり事に専念したせいでも (nirodhadharmatāyogāt)、滅して般涅槃してしまった (niruddhāḥ parinirvṛtāḥ)。

5.16 (金剛薩埵が毘盧遮那を化作し彼らの救済を行う)

まさに瑜伽にして如来なる、かの世尊金剛薩埵は一切の解脱を浄化するために [毘盧遮那] 仏としての化作をもたらした (buddhanirmāṇam āvahet)⁴⁹。

⁴⁵ adhve は古典梵語では adhvani に相当する。

⁴⁶ この「如来」は金剛薩埵を指し、その彼が 5.16 以下で毘盧遮那として現れ出ると理解した。5.16b では金剛薩埵を如来と呼ぶ (vajrasattvas tathāgataḥ)。

⁴⁷ Praśānta (68b7–69a2) は次のように注釈する。「以上のように自性身の自体を有する [金剛薩埵] が、世俗として貪行の者を教化するために、世尊が一切存在の自性を持つと説示した後で、寂靜行の衆生を教化するために法界清浄に悟入して、一切の自性の在り方を示すために、**太古の昔**云々と仰った」。Pramudita (399b7–400a3) はこれらの物語りをクリタユガ期の出来事として解説する (本稿序文参照)。

⁴⁸ Praśānta (69a3) は「**過度な空性に没頭した**とは、有余依と無余依涅槃に努め励む者である」と釈する。

⁴⁹ Praśānta (69a3–4) は「**一切の解脱**とは声聞などの般涅槃である。その**浄化**とは不二を自性とする法を会得してから大悲を生み出すことである。**もたらす** (āvahet) とは、実

5.17（正しい空性、智慧と慈悲の不二の説示）⁵⁰

空としても不空としても〔両者の〕中間（madhyamā）としても〔世界は〕認識されない。悲を本体とする者（菩薩）たちの方便は（upāyah karuṇātmanām）、じつに（hi⁵¹）般若波羅蜜との結びきを持つ（prajñāpāramitā-yogo）⁵²。（≈ *Samputa* 1.3.14）

5.18–19（無分別を確信した上で有分別なる説法をなす毘盧遮那）

それゆえに彼（金剛薩埵）は無分別〔の境地〕について確信を持ちながらも、〔あえて〕明瞭なる大悲の方便と般若波羅蜜を、一切の分別として、構

行されたということである」と釈する。Pramudita（400b1–2）は「放棄すべきその瑜伽（極端な空性の観想）をお知りになってから、**世尊金剛薩埵なる如来**（5.17）は、空性に一辺倒に執着している人々が空性から解放されて、無余依涅槃から退くために、毘盧遮那の胎蔵生曼荼羅（mṅgal skyes kyil dkyil 'khor）を生起なさったのである」と釈する。

⁵⁰ 5.17–20 は *Samputa* 1.3.14–18 に対応偈がみられる。ただし偈の順序の入れ替えや異読が多くある。本稿末資料3にその注釈 *Āmnāyamañjarī* とあわせて提示した。

⁵¹ *Āmnāyamañjarī* は hi を yasmāt（なぜなら）と換言するがここでは従わない。

⁵² Praśānta（69a4–6）：「**空ではない**とは、諦であり、遍計から生じたもの（世俗）は存在するということである。**不空ではない**とは、遍計されたものが〔勝義としては/円成実性においては〕無いこと。**中間**とは、その両者（空と不空）が無いと把握する智であり、中道が成就するまでは、それ（中間）もまた分別の対象領域であるので、〔勝義として〕**認識されない**（nopalabhyate）であり、それ（非認識）こそが**般若波羅蜜との瑜伽**と言われる。大悲によって抱かれて、**悲を自体とする**〔菩薩〕は人々への利益のために、諸仏の**方便**であるということが言い残されている」。Pramudita（400b2–5）：「その毘盧遮那の曼荼羅によって、さらにどんな見解を示すのかと考えるならば、**空でもなく不空でもなく**云々と仰った。勝義としては〔中観派の〕如幻（māyopama）と無住（apratīṣṭhāna）の見解の**空でもなく**、〔唯識派の〕有相と無相の見解の**不空でもなく**、不二双入の**中間**においても認識しないので、般若空性と方便大悲を自体とする無分別なる法身にもとづいて、清浄世間智が観察されるのである」。

想して (kalpayan)、[そして本来は] 無分別なる諸法において、こだまの音に等しい、衆生利益という分別を [を構想して]、そのあとに彼は法の言葉を有するもの (= 毘盧遮那) となった (つまり言葉で説法した) ⁵³。(≈ *Samputa* 1.3.15, 16ab, 17cd) ⁵⁴

5.20 (如来への讃頌の導入)

それゆえに偉大なる大乘における真実たる広大なる諸徳性をもって

⁵³ Praśānta (69a6–b2)「**彼**とは金剛薩埵のことであり、[文章は]**法を語る** (dharmavāg 5.19d) 毘盧遮那となった (abhūt)、とつながる。化現を示すために、**悲**などと説かれた。そこにおいて**明瞭なる大悲の方便と般若波羅蜜** (karuṇopāyaprajñāpāramitā) があるものは、無垢であるので、そのように説かれた。**無分別なる諸法において** (avikalpeṣu dharmeṣu) とは、[金剛薩埵は] 一切分別を離れているが (cf. avikalpādhimokṣe 'pi)、所化のために曼荼羅やムドラーなどの一切を分別して変化するのである。**無分別**とは、不二を自性として衆生利益において分別をなす世俗的なものである。勝義としては、**こだまの音と等しい** (pratiśrutkāraवासamām)、つまりやまびこと等しい。**法**とは、三三昧耶のことである。それを説示する言葉を持つ者が、**法を語る者** (dharmavāg) である。tato (5.20) とは、[金剛薩埵が] **法を語る者** (= 毘盧遮那) となった後で、ということである」。Pramudita (D400b5–7) : 「**無分別 [の境地] について確信を持ち** (avikalpādhimokṣa) とは、[金剛薩埵としての] 瑜伽者に対する信解であり、一切の尊格衆はこだま (pratiśrutkāvara) またはやまびこの在り方で観想されるべきである。愚鈍な人々は尊格の身体に執着するので増益や損減をなしてはならない、という意図を説示するために、曼荼羅輪と尊格を説き示したのであり、未来の三門 (三三昧か) を真言門から行を行じようと望む者たちは、曼荼羅王最勝の [修行の] 際に、大乘の広大な徳性の歌 (cf. 5.21–25) によって、三時における一切如来を讃嘆するべきである」。

⁵⁴ 梵本と蔵本の偈には順序の入れ違いがあり、梵本 5.18cd=蔵本 5.19ab、梵本 5.19ab=蔵本 5.18cd となっている。また 5.18–19 の *Samputa* との対応関係は下記の通り。5.18: tataḥ sa karuṇopāyaprajñāpāramitāṃ sphuṭām | avikalpādhimokṣe 'pi kalpayan sarvakalpanām || ≈ *Samputa* 1.3.15: tatas sukaruṇopāyāḥ prajñāpāramitāsphuṭam | avikalpeṣu dharmeṣu na bhāvo na ca bhāvanā ||. 5.19: avikalpeṣu dharmeṣu sattvārthaparikalpanām | pratiśrutkāraवासamām tato 'sau dharmavāg abhūt || ≈ *Samputa* 1.3.16ab + 17cd.

(mahāmahāyānasadbhūtaguṇavistaraiḥ)、三世の、そして三三昧耶⁵⁵をもつ (traiyadhvikās trisamayā) 一切如来たちは [讃頌⁵⁶で] 歌い上げられる⁵⁷。
(≈ *Saṃpuṭa* 1.3.18) ⁵⁸

【資料 1: サント本と Dhīḥ 本の異読リスト】

- ・本稿の梵文和訳はサント本を底本とした。既刊の Dhīḥ 本の読みがサント本と齟齬する場合、Dhīḥ 本の読みを採用せずサント本の読みを採用した。下記にはそれらの異読を列挙する。
- ・左側に Dhīḥ 本の読みを挙げ、矢印 (→) の右側に採用すべきサント本の読みを挙げる。
- ・半偈ごとに異読を挙げる。但し連声の異読は原則として報告しない。

第5章 1-20 偈

5.1 異読なし

5.2 cd: parāsiddhir anuttarā → parā siddhir anuttarā

⁵⁵ 三三昧耶 (trisamayāḥ) については様々な解釈の可能性があり、ブラシャーンタミトラは三身を持つ者と理解する。以下に続く 5.21–25 の讀が *Trisamayarāja* に由来する讀であることから、この語が用いられた可能性もある。

⁵⁶ 讃頌は 5.21–25 所説のいわゆる執金剛阿利沙偈を指す。

⁵⁷ Praśānta (69b2–4): 「大乘とは、所縁・正行・智慧・精進・一切方便 (方便善巧)・(現証)・[仏] 業という [七つの] 偉大性を具えるものであり (cf. *Mahāyānasūtrālamkāra* 19.59–60)、果を伴う菩薩道と『般若 [経]』などの經典を自性とす。今生で仏などとして確実に生起する点で偉大 (mahā) であるゆえに、偉大なる大乘 (mahāmahāyāna)、つまり金剛乗である。そこから出現した広大な徳性とは、三身によって集約されるものを示すのであって、asama 云々 [の讃偈] (5.21–25) である。歌い上げられる (gītāḥ) とは、称賛されるということである。「三世の」(traiyadhvikāḥ) とは、三つの時間に属する者たちである。三三昧耶 (trisamayāḥ) とは、三身を自体とする [仏] である」。

⁵⁸ 5.20cd: traiyadhvikās trisamayā gītāḥ sarvatathāgatāḥ | ≈ *Saṃpuṭa* 1.3.18cd: traiyadhvikā sarvatathāgatā anena stotrarājena saṃstuvanti sma |

- 5.3 異読なし
- 5.4 ab: sarvabuddhavikurvitaḥ → sarvabuddhavikurvitaḥ
- 5.5 異読なし
- 5.6 cd: svādhideva pratimukhaiḥ → svādhidevapratimukhaiḥ
- 5.7 ab: maṇḍalaseved → maṇḍalam āseved⁵⁹
- 5.8 異読なし⁶⁰
- 5.9 ab: sadāsthitaḥ → sadā sthitaḥ
- 5.10–11 異読なし
- 5.12 ab: sarvabuddhādīsthīracalā sarvabhāvā →
sarvabuddhādīsthīracalān sarvabhāvān
- 5.13–14 異読なし
- 5.15 cd: nirodhadharmatāyogāniruddhāḥ → nirodhadharmatāyogān niruddhāḥ
- 5.16 d: buddhanirvāṇam āvatet → buddhanirmāṇam āvahet
- 5.17 ab: vā śūnyam → cāśūnyam
cd: prajñāpāramitāyogādyupāyaḥ → prajñāpāramitāyogo hy upāyaḥ⁶¹
- 5.18 異読なし
- 5.19 ab: sarvāvikalpeṣu → avikalpeṣu
cd: pratiśrutkārasamāntato `sau → pratiśrutkāravasamāṇam tato `sau
* サント本は Dhīḥ 本の 5.18ef を 5.19ab としている。

⁵⁹ viśvamudrā- (5.7b): Dhīḥ 本が元にした写本には visumudrā とあるが、校訂注なしに修正している。

⁶⁰ param pravakṣyāmi(5.8a): Dhīḥ 本が元にした写本には paramparam pravakṣyāmi とあるが、校訂注なしに修正している。

⁶¹ Dhīḥ 本が元にした写本 (5v6) にある読みはサント本と同じであり、この異読は単純に Dhīḥ 本の読み間違い。

5.20 異読なし

* サント本は Dhīh 本の 5.19cdef を 5.20 としている。

【資料2: 第5章注釈箇所対照表】

- ・下記の D1659、D1660、D1663 はそれぞれ、インドラナーラ注、プラムディタヴァジュラ注、プラシャーンタミトラ注のデルゲ版の番号（東北番号）を示す。
- ・表中の偈の番号はサント本に従った。
- ・Dhīh 本は 5.18–19ab を 5.18、5.19cd–20 を 5.19 と数える。これらサント本と偈番号が異なる箇所については、[] 内に Dhīh 本の偈番号を示した。

偈	D1659 (Indranāla)	D1660 (Pramuditavajra)	D1663 (Praśāntamitra)
冒頭	287a4–b1	—	—
5.1	287b1–5	398a3–5	67b6–68a2
5.2	287b5–288a5	398a5–b3	68a2–4
5.3	288a5–b2	398b3–6	68a4–6
5.4	288b2–5		68a6–7
5.5	288b5–289a5	398b6–399a2	68a7–b1
5.6	289a5–b2	399a2–4	68b1–2
5.7	289b2–5	399a4–6	68b2–3
5.8	289b5–290a1	399a6–7	68b3–5
5.9	290a1–3	399a7–b2	68b5–6
5.10	290a3–b1	399b2–3	68b6
5.11	290b1–4	399b3–4	68b6–7
5.12	290b4–5	399b4	—

5.13		399b4-7	—
小題	—	—	68b7
5.14	290b5-291a3	399b7-400a3	68b7-69a2
5.15	291a3-6	400a3-b1	69a2-3
5.16	291a6-b5	400b1-2	69a3-4
5.17	291b5-292a7 (v. 5.17ab)	400b2-5	69a4-6
	292a7-b3		
5.18	(vv. 5.17cd-18ab)	400b5	69a6-b2
[18ab cd]	292b3-6 (vv. 5.18cd-19ab)		
5.19	292b6-293a2 (vv. 5.19cd-20ab)		
[18ef- 19ab]			
5.20		400b5-7	69a4-6
[19cd ef]	293a2-3 (v. 5.20cd)		

【資料3：『サマーヨーガ』5.17-20に対するアバヤーカラグプタの理解】

以下にはアバヤーカラグプタの『アームナーヤマンジャリー』から、本稿と対応する偈への注釈箇所を抜粋し、その梵文テキストと試訳を提示する。同書は『サンプタ』(*Saṃpuṭodbhava*)に対する注釈であり、西暦1114年8月4日から1116年8月1日(ラーマパーラ王第37年目, Hori 2019 および堀伸一郎先生のご教示による)に完成した。『サンプタ』は『サマーヨーガ』から複数の偈を取り込んでいる。本稿で扱った『サマーヨーガ』5.17-

20 は『サンプタ』1.3.13–17 に対応する。ただし異読も少なからずあり、下記『サンプタ』の読み、特にアバヤーカラグプタの理解に従う。その場合『サマーヨーガ』の対応偈とは異なる和訳を提示することもある。両テキストの平行偈については Szántó 2016 を参照した。

写本は梵文と蔵文が併記されたバイリンガルの写本であり、梵文は奇数行、蔵文は偶数行に交互に記される。写本の詳細は 苦米地 2017 を参照されたい。下記はその奇数行に記される梵文のみを抜粋したものである。

梵文テキストの中の太字は偈頌の文言を示す。偈頌は写本には記されないため、本校訂者が Wisek Mical による偈本の梵本テキストから抜き出して下記のテキストに挿入した。テキストの綴り字や連声は適宜標準化し、分節記号やアヴァグラハは適宜添削した。チベット訳では D1198, 40b1–42a3 に対応する。

Āmnāyamañjarī

ad *Samṣṭa* 1.3.13–17; cf. *Samāyoga* 5.17–20

(fols. 116r4–121r3)

[*Samāyoga* 5.17]

na śūnyaṃ nāpi cāsūnyaṃ madhyamā nopalabhyate |

prajñāpāramitāyogo hy upāyo karuṇātmanaḥ⁶² ||⁶³

na śūnyam apavādarūpaṃ saṃvṛtibhāsamānatvāt. **nāsūnyaṃ** paramārthato niḥsvabhāvāt. **nāpi** pāra_(116r5)mārthikīprakāśavapuṣā⁶⁴ nāsat tadanyaīś ca grāhya-

⁶² Cf. -ātmanām *Samāyoga*.

⁶³ *Samṣṭa* 1.3.13.

⁶⁴ pārama-] em., parama- Ms.; -vapuṣā] em. (lus kyis), -vapurūṣā Ms.

tvādibhir na saḥ jagan **madhyamā** pratīpad **upalabhyate**.⁶⁵ upalabdhir hi tasyāḥ
sādhikā, tac ca svasamvedanaṃ pratyakṣaṃ nāstīti⁶⁶ sādḥaka_(116v1)pramāṇābhāvaḥ.
bādhakapramāṇaṃ⁶⁷—

yathaiiva darpaṇe rūpaṃ⁶⁸ ekatvānyatvavarjitam⁶⁹ |

dr̥śyate na ca tatrāsti tathā bhāveṣu bhāvatā || (*Laṅkāvatāra* 10.709)

ityādinā sūtrādiṣu bahuśaḥ prakāśita_(116v3)m iti bhāvaḥ. evaṃ pūrvārdhena śūnyatā-
tattvam uddīpitam. na ca tad eva hetutantram. **hi** yasmāt. **karuṇātmanaḥ**
karuṇāsvarūpasya _(116v5) **prajñāpāramitayā** śūnyatayā **yogas** tādātmyam **upāyo**
hetuḥ phalavajradharasya. **karuṇātmaṇeti** pāthaḥ kvacit.

[*Samāyoga* 5.18ab, 5.19a]

tatas sukaruṇopāyā⁷⁰ **prajñāpāramitā sphuṭam** |

avikalpeṣu dharmeṣu na bhāvo na ca bhāvanā ||⁷¹

yasmād evaṃ **tataḥ** sukaruṇānā_(117r1)lambanā mahākṛpā, **upāyas** tādātmyasamba-
ndhād yasyāḥ, sā **prajñāpāramitai**va **sphuṭam** samvṛtyā prakāśamāṇaṃ bodhi-
cittam iti _(117r3) sambandhaḥ. etenānādinidhanaśūnyatākaruṇātmaṃ⁷² jagad eva
niruttarahetubhūtaṃ bodhicittam uktaṃ bhavati. tasyādhigamopāyaṃ bhāvanāṃ
_(117r5) ṣaṣṭhe nirdeksyamāṇam uddīśati. **avikalpeṣv** iti sarvāroparahiteṣu **dharmeṣu**

⁶⁵ Cf. *Sākārasiddhi*, Chap. 6, (Thakur ed.) p. 512.6–9.

⁶⁶ nāstīti] conj., na samastīti Ms. 蔵訳は yod pa ma yin pas. 但し訂正は暫定案に過ぎない。

⁶⁷ bādhakapramāṇaṃ] em., bādhakarṇapramāṇaṃ Ms.

⁶⁸ rūpaṃ] em., rūpan Ms.

⁶⁹ ekatvānya-] em., ekanya- Ms.

⁷⁰ -opāyā] em., -opāya- Mical ed.

⁷¹ *Saṃpūta* 1.3.14.

⁷² -ātmakaṃ] em., -ātmaka Ms.

rūpādipañcaskandheṣu **na bhāvo** bhāvyaḥ svabhāvaḥ (117v1), śūnyatvāt sarvadhar-
māṇām. **na bhāvanā** bhāvako vā bhāvanīyābhāvāt. sarvadharmāvikalpenaiva⁷³
bhāvanety ākūtam. yad⁷⁴ vakṣyati (117v3)—

na yatra bhāvakaḥ kaścin nāpi kācid⁷⁵ dhi bhāvanā |

bhāvanīyaṃ na caivāsti socyate tattvabhāvanā || (*Samputa* 2.2.12)

iti.

[*Samāyoga* 5.18cd, 19ab]

yady avikalpanaṃ, (117v5) kathaṃ⁷⁶ samayasevādeḥ svādhigamāvasthāviśeṣasya
vā parārthasya vā niṣpādanam ity āha—**avikalpetyādi**⁷⁷

avikalpādhimokṣe 'pi kalpayet sarvakalpanām |

avikalpeṣu dharmeṣu sattvārthaparikalpanā ||⁷⁸

avikalpādhimokṣe 'pi satī (118r) **sarveṣāṃ** samayasevādīnām **kalpanānām**⁷⁹
niṣpādanam kuryād yogī. nirvikalpādhimokṣe prāyaḥ parārthavaimukhyaṃ saṃ-

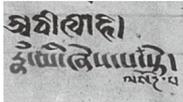
⁷³ naiva] em., na meva Ms.

⁷⁴ 第2カルパの第2プラカラナを意味するチベット文字 gnyis pa'i gnyis par が写本欄外に追記され、写本筆記者によって典拠が提示されている。

⁷⁵ kācid] em., kaścid Ms.

⁷⁶ kathaṃ] conj. (Tib. ci ltar), om. Ms.

⁷⁷ avikalpetyādi] conj., avītyāha Ms. 写本中の蔵文には rnam mi zhes pa <la sogs pa ste>とある（括弧内は写本筆記者による補語。下画像）。ここでは梵本の脱字に従って蔵文の書写にも誤記が生じている。梵文を理解しながら蔵文を書写していたことの証左か。



⁷⁸ *Samputa* 1.3.15

⁷⁹ kalpanānām] em., kalpanām Ms.

bhāvya bhūyaḥ sattvārthe niyojayatī⁸⁰ (118r3)—**avikalpeṣv** ityādi. evam anena prathamābhyaśadaśāyām adhimuktyaivāvikalpanaṃ sambhavati,⁸¹ tasmimś ca sarvaṃ sampādayed ity⁸² abhipretam. (118r5)

[*Samāyoga* 5.19cd]

tathāgatātmakaṃ dharmaṃ na dharmī na ca dharmatā |
pratiśrutkāravasamā tato 'sau dharmavāg abhūt ||⁸³

yadā tu bhāvanāyāḥ kramāt prakarṣaparyante bodhicittaṃ sarvatathāgatātmakaṃ **dharmaṃ**⁸⁴ dharmakāyo bhavati tadā **na dharmī**, rūpaskandhādi^(118v1)naiḥsvābhāvāt. **na ca** tasya dharma eva **dharmatā** śūnyatā. saṃvṛtyā tu dvayam apy abhinnaṃ astīti vyavasthāpyate. śūnyatāyā bhāvebhyo 'pṛthak^(118v3)tvāt. ^{→85}tathā coktam avikalpapraveśāyāṃ dhāraṇyāṃ—

avikalpāśayo bhūtvā saddharme 'smin jinātmajaḥ |
vikalpadurgaṃ vyatītya^(118v5) kramān⁸⁶ niṣkalpaṃ āpnute ||

⁸⁰ niyojayatī] em., niyojayati Ms.

⁸¹ sambhavati] em., sambhavanti Ms.

⁸² sampādayed ity] em., sampādayety Ms.

⁸³ *Saṃpūṭa* 1.3.16.

⁸⁴ dharmaṃ] em., dharma Ms.

⁸⁵ Cf. *Guṇavatī* ad *Mahāmāyātāntra* 1.19 (ed. Samdong and Dwivedi, pp. 15–16): tathācoktam avikalpapraveśāyāṃ dhāraṇyāṃ (...) tasmin gāthādvaye 'vikalpāśaya itī sthīrāśayaḥ. saddharme 'smīn itī mahāyāne. jinātmaja itī boddhisattvaḥ. vikalpa eva caturvidho durgāḥ, taṃ kramād vyatītya atikramya. niṣkalpaṃ āpnuta itī nirvikalpaṃ nisprapañcajñānaṃ prāpnotīti. tasmād eva jñānān nirvikalpasukhaṃ āpnotī. praśāntam niṣkleśatvāt, acalam aparihāṇīyatvāt, śreṣṭham sarvalaukikalokottarasukhotkṛṣṭatvāt, vaśavartī, yatheccha yāvadīcchaṃ ca saṃmukhīkaraṇāt, samaṃ tulyaṃ tadanyasukhaiḥ sukhajātyā, asamam ebhir eva catubhir viśeṣaiḥ. 種村ほか 2021: 20–21 n. 27 参照。

⁸⁶ kramān] em., kramā Ms. Cf. 松田 1996: 99.

praśāntam acalaṃ śreṣṭhaṃ vaśavarti samāsamaṃ |
nirvikalpasukhaṃ tasmād bodhisattvo 'dhigacchati⁸⁷ ||

iti. atrāvi_(119r1) **kalpāśayo** 'vikalpādhimokṣaḥ⁸⁸ sthiraḥ. **saddhar**me tattve. **vikalpa**
eva caturvidho **durgaḥ**. **kramād** abhyasya⁸⁹ **niṣkalpaṃ** _(119r3) niṣprapañcajñānaṃ
prāpnoti. **tasmā**j jñānāt **sukhaṃ adhi**gacchati. **praśānta**n niḥkleśatvāt. **acala**m
aparihāñīyatvāt. **śreṣṭhaṃ** _(119r5) sarvalaukikalokottarasukhotkrṣṭatvāt. **vaśavarti**
yatheṣṭaṃ yāvad-icchaṃ ca saṃmukhīkaraṇāt. **samaṃ** tulyaṃ tadanyasukhaiḥ
_(119v1) sukhajātyā. **asama**m ebhir eva caturbhir viśeṣaiḥ.←

evam **avikalpeṣv** ityādinā phalavajradharasya bhāvanādinikhilavikalpāstaṃ_(119v3)-
gam abhipretam.⁹⁰ evam api prākprañidhānādhipatyenānavadhiparopakāraprava-
rtaṇaṃ **tato** vajradharād ity āha—**pratiśrutkāravasameti**. _(119v5) samutthāpaka-
vikalparahitavena naiḥsvabhāvyena ca sāmīyāt. **dharmasya** svayam adhiगतasya
hetutantrāder **vāk** saṃpuṭatantrādi _(120r1) mahāyānam. evaṃ svaparārthasamprat-
karṣāśrayaḥ.⁹¹ phalabhūtam anuttaraṃ bodhicittaṃ bodhicittaprasaṅgād⁹² dhetur
eva, _(120r3) viśuddhaḥ phalam ity abhisandhāyoktaṃ.

[*Samāyoga* 5.20]

atrārthe vairocānādītathāgatānām avetya prasādaṃ stotreṇopadarśayitum āha—
tata ityādi.

⁸⁷ 'dhigacchati] em., gacchati. Cf. 松田 1996: 99、苦米地 2017: 108.

⁸⁸ 'vikalpā-] em., 'vikanā- Ms.

⁸⁹ kramād abhyasya] conj., kramo 'bhyāsasya Ms.

⁹⁰ abhipretam] em., abhipreti Ms.

⁹¹ svaparārtha-] em., parārtha- Ms.

⁹² bodhicittaprasaṅgād] em., bodhicittaṃ prasaṅgād Ms.

tato mahāyānasambhāvabhāvanāguṇavistaraiḥ |

traiyadhvikā sarvatathāgatā anena stotrarājena saṃstuvanti sma ||⁹³

yato hetuphalaparārthasampatsampādanānvitas **tatas** taṃ vajradharaṃ **saṃstuvanti sma**. yāyate prāpya_(120v1) te tad iti pradhānaṃ yānaṃ⁹⁴ phalaṃ. yānty aneneti tu tādarthyaḍ⁹⁵ gaṇaṃ yānaṃ mārgaḥ. tadubhayābhidhāyakaś⁹⁶ ca granthasandarbhāḥ. śrāvakādiyā_(120v3) nebhyo *munimatālaṃkāre*⁹⁷ vivṛtanavavidhamahattvayogān mahac ca tad yānaṃ ceti **mahāyānam**. tatra **samyag bhavanaṃ** _(120v5) prādurbhāvo yeśāṃ vakṣyamāṇaḥ **guṇānāṃ** teśāṃ **vistaraiḥ** prasaraiḥ.⁹⁸ trayo 'dhvānaḥ kālāḥ teṣu bhāvāt⁹⁹ **traiyadhvikāḥ**. tatra ye lokadhātāv u_(121r1) paratadeśanādivyāpārās te 'tītā iti vyavasthāpyante. sattve 'py akiñcitkaratvenāsatkalpyā ity ākūtena. ye deśayanti _(121r3) te vartamānāḥ. ye deśayiṣyante te 'nāgatāḥ. santi punaḥ sarva eva. lokadhātvantare 'py evaṃ vyavasthā.

試訳

[サマーヨーガ 5.17]

[世界は] 空ではなく、不空でもなく、中 [道] としても認識されない。じつに¹⁰⁰ 悲を自体とする者にとっては、般若波羅蜜と結

⁹³ *Saṃpūṭa* 1.3.17.

⁹⁴ yānaṃ] em., yāna Ms.

⁹⁵ tādarthyaḍ] em., tādarthya Ms.

⁹⁶ tadubhayā] em., taduṣā- Ms. Cf. de gnyis ka.

⁹⁷ Cf. *Munimatālaṃkāra*, Skt. fol. 148r1–3.

⁹⁸ prasaraiḥ] em., prasarai Ms.

⁹⁹ bhāvāt] em., bhavāt Ms.

¹⁰⁰ アバヤーカラグプタは hi を、yasmāt (つまり理由の意味) と換言するが、文脈的にそ

合したものが、方便である¹⁰¹。

[世界は] 損滅の性質をもった、空なるものではない。世俗として顕現しているからである。[世界は] 不空ではない。勝義としては無自性だからである。また中道一つまり勝義としての [形象の] 照出の本質という点では存在しないことはなく、かつそれ（照出）以外の所取性など（二取）の点では存在しない世界—もまた、認識されない¹⁰²。というのは (hi)、それ（中道）を論証する手立て（*sādhikā, sgrub par byed pa*）が認識（*upalabधि*）であるが、しかし (ca) それ（認識）は自己認識なる直接知覚としては存在しないからである¹⁰³。だから (iti)、[この中道を] 論証するプラマーナは存在しない。[一方でこの中道を] 拒斥するプラマーナは、

ちようど鏡の中の姿は同一性と別異性とを離れて現れるが、そこ（鏡）の中に実在するわけではないように、諸物における存在性も同様である¹⁰⁴。

云々によって、経典などにおいて繰り返し明かされた。以上が [madhyamā nopalabhyate という文言の] 意図である。以上、前半句（*na sūyanaṃ ... nopalabhyate*）によって空性の真実が明示された/掲げられた。

そして他ならぬそれ（前半句所説の空性の真実）は原因のタントラでは

のような理解は困難であるため、仮に hi を「じつに」と理解した。

¹⁰¹ *Samputa* 1.3.13.

¹⁰² Cf. *Sākārasiddhi*, Chap. 6, (Thakur ed.) p. 512,6–9. テキストと訳は本稿序文参照。アバヤーカラグプタは、*Sākārasiddhi* 所説の有形象唯識の立場での「中道」（照出する形象は勝義として存在し、それは自己認識であるとする立場）を中観の立場から斥けている。なおこの偈は *Sekanirdeśapañjikā* (Isaacson and Sferra 2014: 171, 270) に引用される。

¹⁰³ 拙訳は暫定訳である。別訳としては「というのは、それ（中道）の認識は上位要素を伴う (*sādhikā*) のだが、しかし (ca) それ (= *adhika*) たる自己認識という直接知覚は [勝義の上では] 存在しないからである」ともするか。

¹⁰⁴ 『楞伽経』 10.709.

ない。hi という語は「なぜなら」の意味である。悲を自体とする者、つまり悲を本質とする者には、**般若波羅蜜**つまり空性との**結合**つまり同一性があり、[それが] **方便**、つまり結果たる持金剛にとっての原因（＝原因のタントラ）である。ある所（異本）では karuṇātmaṇā という異読がある。

[サマーヨーガ 5.18ab, 19a]

それゆえ勝れた悲を方便として有するものが般若波羅蜜であり、明らかに [顕われる菩提心である]。分別なき諸法において存在（つまり観想対象）はなく観想もない¹⁰⁵。

以上の如くであるので、**それゆえ勝れた悲**つまり無所縁なる大悲が、同一性の結合関係に基づいて（つまり大悲と方便は内実が同じ）**方便**を有しているところのもの、それが**般若波羅蜜**であり、**明らかに**世俗として顕れている菩提心である、と [文が] つながる¹⁰⁶。このことによって、無始無終の空性と悲を自体とする世界こそが、無上の因である菩提心だと説かれたことになる。第6章で後述される、それを証得する方便なる観想を教示している。

分別なきつまり一切の増益を離れた**諸法**つまり色などの五蘊において、**存在**つまり観想の対象（bhāvya）という自性はない。なぜならば、一切諸法は空であるからである¹⁰⁷。[またそれら諸法において] **観想**あるいは観想の主体はない。なぜならば観想の対象（bhāvaniya）が存在しないからである。一切諸法を分別しないことによるのみ、観想があるという意図であ

¹⁰⁵ *Samputa* 1.3.14.

¹⁰⁶ Cf. atha sarvatathāgatābhībhavanavirajapadaṃ nāma samādhim | samāpadyedaṃ bodhicittam udājahāra || *Samputa* 1.3.12.

¹⁰⁷ チベット訳は*svabhāvaḥ svabhāvaśūnyatvāt のような読みを示すが採用しない。

る。次のように説かれた。

そこに観想者は皆無であり、観想も皆無であり、観想対象も皆無である場合、それが真実の観想であるといわれる¹⁰⁸、と。

[サマーヨーガ 5.18cd, 19ab]

もし、無分別であるならば、[どのようにして] 三昧耶への親近などに基づいて自らの証得の特別な分位、あるいは利他を完成するのか、ということに関して言う。

無分別を信解した場合にも、一切の分別（三昧耶への親近など）を構想すべし（完成すべし）。無分別なる諸法に対して、衆生利益という分別が〔生じる〕¹⁰⁹。

無分別の信解がある場合にも、**一切の三昧耶への親近などの諸分別の完成**を瑜伽者は為すべきである。無分別の信解がある場合には、しばしば利他に背きがちだが（sambhāvya）、再び、衆生利益へと結びつけさせるので、**無分別なる**云々という。このように、これ（当該偈頌）によって、最初の習熟の段階ではほかならぬ信解によって無分別が生じ、そしてそれ（無分別）で一切を完成させるべし、ということが意図されている。

[サマーヨーガ 5.19cd]

[菩提心は] 如来を自体とするダルマであり、ダルミンは存在せず、そして法性（=空性）は存在しない。彼（持金剛）にもとづく、この法の語は、こだまの響きのごとくであった¹¹⁰。

¹⁰⁸ *Saṃputa* 2.2.12.

¹⁰⁹ *Saṃputa* 1.3.15.

¹¹⁰ *Saṃputa* 1.3.16.

いっぽう修習が次第して究極に至った際に、菩提心は一切の**如来を自体とするダルマ**つまり法身となるとき、その時、**ダルミンは存在しない**。色などの蘊等は無自性だからである。そしてそれ（ダルミン）にとつてのダルマたる、**法性**、つまり空性は「**単独では**」存在しない。一方、世俗としては、不可分なるものは二なるものとしても存在すると規定されている。なぜならば、空性は諸存在と別個に存在するわけではないからである。¹¹¹ また同様に、『入無分別陀羅尼』に「次のように」説かれた。

勝者子はこの正法において無分別への志を持つ者となつてから、分別にして越え難いもの乗り越えて、やがて無分別の境地に至る。菩薩は、それ（無分別知）により、寂靜、不動、最勝、自在、等不なる無分別の安樂に証得する。

と。ここにおいて、**無分別への志を持つ者**とは、確固として無分別への信解を持つ者である。**正法において**とは、**真実において**ということである。四種の**分別**にして越え難いもの「が *vikalpadurga* の意味である」。次第に（*kramāt*）修習してから（*abhyasya*）、無分別の境地、つまり無戲論の知を得る。その知に基づいて、安樂を証得する。寂靜とは、煩惱がないからである。不動とは、衰退しえないからである。最勝とは、一切の世間のおよび出世間的な安樂よりも優れているからである。自在とは、望んだとおり、望んだ分だけ、目の当たりにするからである。等しいとは、「無分別の安樂は、」その他の諸々の安樂と、安樂という種類の点では、同じであることである。不等とは、「無分別の安樂は、」この四種（寂靜以下）の特殊性という点で「他の安樂とは等しくないということである」。

¹¹¹ 以下は *Guṇavāṭī*, pp. 15–16 とほぼ対応するため、アバヤーカラグプタによる借用とみられる。種村ほか 2021: 20–21 n. 27 参照。後半部の「寂靜とは」(*praśāntam*) 以下はラトナーカラシャーンティの *Prajñāpāramitopadeśa* (D4079, 60b7–61a4) にもみられる。

以上のように、「無分別」云々〔の文言〕によって、結果の持金剛についての修習をはじめとする全ての分別がなくなることが意図されている。

そうであったとしても、前世の誓願の支配力により際限のない他者への資益が生じるのは、**それ**、つまり持金剛にもとづくのである、ということ¹¹²を述べる。「**こだまの響きと等しい**」と。なぜならば〔利他の法語とこだま響きは、〕生み出すという分別が欠如する点で、そして無自性であるという点で等しいからである。〔dharmavāk とは〕法（dharma）に関する、つまり自ら証得する因のタントラなどに関する、語（vāk）、つまりサンプタをはじめとする大乘（さとりに至らせる手段）である¹¹²。

以上のように、自利利他円満の卓越性にとっての基盤なる、果なる無上菩提心は、菩提心ということの帰結としては因にほかならないが、〔その因が〕浄化した場合には結果であるということ¹¹³を意図して説かれた。

〔サマーヨーガ 5.20〕

この意味において、毘盧遮那をはじめとする如来たちの恩寵を知ったうえで、〔その恩寵を〕讃によって説示するために述べた。「**それゆえ**」云々と。

それゆえ大乘において生起する修習の広大な徳性をもって、三時に属する一切如来は次の讃の王で〔持金剛を〕称賛した¹¹³。

〔持金剛が〕因と果によって利他円満の完成を具えた者であるので、それゆえ、かの持金剛を〔如来たちは〕称賛した。〔yāna とは〕それが赴かれる（yāate）、つまり到達されるから、第一義的な yāna は「果」である。一方で、それによって人々が赴くから、それを目的とするという点で、第二

¹¹² 但しブラシャーンタミトラは dharmavāk を所有複合語として毘盧遮那を指すと注釈するため、『サマーヨーガ』の拙訳ではそれに従った。

¹¹³ *Samputa* 1.3.17.

義的な yāna は「道」である。そしてその両者の [yāna の意味] を明示するものが、[サンプタなどの] テクスト群 (granthasandarbhā) である。『牟尼意趣莊嚴』において明らかにされた九種の偉大性と結びついているので¹¹⁴、それ(大乘)は声聞乗などよりも偉大 (mahā) であり、かつ乗 (yāna) である、というのが**大乘** (mahāyāna) である。そこ(大乘)において正しく**生起する**、つまり出現するところの、後述の**諸徳性の拡がり** (vistara) によって、つまり拡張によって [というのが mahāyānasambhavabhāvanāguṇa-vistaraiḥ である]。

[過去・現在・未来という] 三つの時、つまり時間が彼ら(如来たち)に存するから、**三時に属する**。その中で、世界において説法などの活動が停止した [如来たち] が、過去の [如来たち] であると規定される。[つまり、彼ら過去仏は] 存在はするものの、何も為さないで、いないも同然である、という意図による。現に説法している [如来たち] が現在の [如来たち] である。未来に説法するだろう [如来たち] が未来の [如来たち] である。また、すべての [三時の如来たちは] みな存在する。別の世界に関しても、同様の規定がある。

参考文献一覧

(一次資料)

Guṇavatī

= Ratnākaraśānti, *Śrīmahāmāyāntantraṭīkā Guṇavatī*. Ed. Samdhong Rinpoche

¹¹⁴ Cf. *Munimatālamāra*, Skt. fol. 148r1-3. 対応箇所の梵文テキストは加納 2022 を参照。但しそこに説かれるのは9つではなく7つの偉大性である。『大乘莊嚴經論』19.59-60 が典拠とされている。

and Vajravallabha Dwivedi. *Mahāmāyātantram with Guṇavatī by Ratnākaraśānti*. Rare Buddhist Text Series 10. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1992.

Jñānasiddhi

= Indrabhūti, *Jñānasiddhi*. In: Ed. Samdhong Rinpoche and Vajravallabha Dwivedi. *Guhyādi-Aṣṭasiddhi-saṅgraha*. Rare Buddhist Text Series 1. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1987.

Rasendracūḍāmaṇi

= Somadeva, *Rasendracudamani*. Ed. Siddhinandan Misra. Benares : Chaukhamba Orientalia, 1999.

Samāyoga 『サマーヨーガ・タントラ』

= *Sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvara*. (1) Ed. Central Institute of Higher Tibetan Studies, *Dhīḥ: A Journal of Rare Buddhist Text* 58, 2018, pp. 141–201. (Dhīḥ 本と略す。Dhīḥ 本の底本の梵文写本 NGMPP B112/17 を併せて参照した。) (2) Ed. P.-D. Szántó, *The Sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvara*, forthcoming. (サント本と略す。サント本の底本の梵文写本であるコレージュドフランスのインド学研究室図書館所蔵 IÉI SL 48 については、伊集院ほか 2019 を参照。)

Sampuṭodbhava 『サンプタ』

= *Sampuṭodbhavasarvatantranidānamahākālparājāḥ*. Ed. Wiesiek Mical. In Dharmachakra Translation Committee. *Emergence from Sampuṭa: Sampuṭodbhavaḥ*. 84000 Project. 2021. (<https://read.84000.co/translation/toh381.html>)

Sākārasiddhi

= Jñānaśrīmitra, *Sākārasiddhiśāstra*. In: Ed. A. Thakur. *Jñānaśrīmitranibandhāvalī*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1959.

Vajraḍāka

= *Vajraḍākamahātantrarāja*. See Sugiki 2003.

(二次資料)

(和文)

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント

2019 「梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第1章」、『大正大学総合
仏教研究所年報』41、61-100頁。

2020 「梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第2～3章」、『大正大学
総合仏教研究所年報』42、1-36頁。

2021 「梵文和訳サマーヨーガ・タントラ第4章」、『川崎大師研究所紀
要』6、33-63頁。

加納和雄

2022 「アバヤーカラグプタの大乗仏説論一牟尼意趣莊嚴論第4章から
一」、『密教文化』248、2022年（印刷中）。

小林信彦

2006 「サンガが演劇にかかわっていた可能性—建前と食い違う実態
—」、『桃山学院大学総合研究所紀要』31、217-232頁。

桜井宗信

1996 『インド密教儀礼研究—後期インド密教の灌頂次第—』、法蔵館。

静春樹

2022 「ヴァジラパーニ作『上師相承次第口訣』(2) 和訳研究：マイトリ
パ学統の修習論（四印契説）の理解のために」、『密教文化研究所紀
要』35、21-43頁。

杉木恒彦

2004 「『ヴァジュラダーカ・タントラ』第1, 7, 8, 14, 18, 22, 36, 38章—
試訳」、『東京大学宗教学年報』21、143-166頁。

種村隆元、加納和雄、倉西憲一

2021 「なぜ仏の姿の観想がさとりをもたらずのか(2)—Ratnaraksita 著
*Padmini*第13章傍論後半和訳註—」、『川崎大師教学研究所紀要』6、

1-32頁。

苦米地等流

2017 「Abhayākara Gupta 作 *Āmnāyamañjarī* 所引文献—新出梵文資料・第1～4章より—」、『大正大学総合佛教研究所年報』39、99-136頁。

松田和信

1996 「*Nirvikalpapraveśadhāraṇī*—梵本テキストと和訳—」、『仏教大学総合研究所紀要』3、89-113頁。

山崎一穂

2022 「*Avadānakalpalatā*における〈寂靜〉の〈情〉について」、『比較論理学研究』19、139-167頁

(欧文)

Gosh, Manomohan (transl.)

2020 *A Treatise on Ancient Indian Dramaturgy and Histrionics, Nāṭyaśāstram ascribed to Bharata Muni: Sanskrit Text with Transliteration, English Translation Notes, Śloka and Word Index. Vol. 2.* Varanasi: Chaukhamba Surbharati Prakashan.

Hori Shin'ichirō.

2019 The reign of Rāmapāla began in 1078/1079 CE and continued at least up to 1131 CE. *Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies* 2: 49-55.

Isaacson, Harunaga and Sferra, Francesco

2014 *The Sekanirdeśa of Maitreyaṅgala (Advayavajra) with the Sekanirdeśa-pañjikā of Rāmapāla: Critical Edition of the Sanskrit and Tibetan Texts with English Translation and Reproductions of the MSS.* Naples: Università degli studi di Napoli L'Orientale.

Luo, Hong

2020 A First Investigation of Abhayākara Gupta's *Madhyamakamañjarī*. イン

ド学チベツト学研究 24: 57–74.

Pasedach, Peter

2011 *The Haravijaya of Ratnākara and the Commentaries thereon by Utpala and Ratnakaṅṭha: Sargas 1 and 2*. PhD thesis submitted to Hamburg University.

Shulman, David and Thiagarajan, Deborah (eds.)

2006 *Masked Ritual and Performance in South India: Dance, Healing, and Possession*. Ann Arbor: Centers for South and Southeast Asian Studies, University of Michigan.

Sugiki, Tsunehiko

2003 A Critical Study of the *Vajradākamahātantrarāja* (III): Sacred Districts and Practices Concerned. 智山学会報 52: 53–106.

Szántó, Péter-Dániel

2016 Before a Critical Edition of the Samputa. *Zentralasiatische Studien* 45: 397–422.

Szántó, Péter-Dániel and Griffiths, Arlo

2015 Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālaśaṃvara. In: Jonathan A. Silk, et al. (eds). *Brill's Encyclopedia of Buddhism, vol. 1: Literature and Languages*. Leiden: Brill, 367–372.

Wedemeyer, Christian

2008 *Āryadeva's Lamp that Integrates the Practices (Caryāmelāpakapradīpa): The Gradual Path of Vajrayāna Buddhism According to the Esoteric Community Noble Tradition*. New York: American Institute of Buddhist Studies.

<キーワード> サマーヨーガ・タントラ第5章、梵文和訳

(令和3年度科学研究費[17H04517] [17K02222] [18H03569] [18K00074] [19K00062])による研究成果の一部。本稿の作成に際しては種村隆元氏から多くの助言を頂いた。インド

梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第5章 1-20 偈（伊集院、加納、倉西、サント）

古典文学に現れる仮面については Somadev Vasudev 氏から貴重な助言を頂いた。本稿においてテキストの精読は共著者全員で行った。タントラ本文の梵文校訂はサント、資料1は倉西、資料2は伊集院、序文・下訳・資料3は加納が担当した。）